NEWS CAST

July 1995
No.43

日本がん疫学研究会

がんのリスク評価
第18回日本がん疫学研究会から

馬淵清彦（放射線影響研究所・疫学部）

去る6月2日、広島で「がんリスク評価」を主題として、第18回日本がん疫学研究会を開催させて頂きましたが、約80人の方々に出席いただき感謝しております。当日は、まず、定量的なリスク評価の進歩の著しい放射線とタバコに関するリスク推定の概略に始まり、近年リスク要因についての理解が急速に進んでいる乳がんと肝がんの疫学的評価、さらに、パネル・ディスカッションにより、社会的、行政的、心理学的側面からリスク評価の問題点の討議が行われました。われわれ、放射線疫学にたずさわっているものにとって、リスク評価は、最も重要な研究課題で、この分野では、広島・長崎の原爆被爆者の長期追跡調査行ってきた放射線影響研究所は、国際的な放射線防護基準設定のため、放射線リスク・データの提供のみならず、リスク評価の技術の発展につくしてきました。しかし、がんのリスクを正しく評価するには、がんは多因子、多段階の疾患で、多くのリスク要因からなることから、放射線以外の要因も含めて広範な検討が必要となります。従って、今回の研究会の意図は、放射線疫学と、タバコ、食餌、ヴィールス等の疫学の間の橋渡しと、総括的ながんのリスク評価を試みることでした。更に予防医学の実践の見地から、リスクの概念を一般の人々に、より広く、正しく理解してもらう必要があることから、行政、心理、社会的な面からの討議も含めました。

放射線によるリスクと、タバコのような他のリスクとの間にどのような違いがあるのか？　その大きさ、性格、そして社会や個人個人による認知や受容、予防のためのアプローチはどう異なるのか？　また、これらの違いはどうして起こるのか？　多くの興味深い問題点がありますが、時間の制限上、深く討論できなかったのが残念です。しかし、このような問題についてさらに実質的な討議を発展するためには、ひとつの大きなものがかけている事も判明しました。それは、我が国における総合的なリスク評価のデータがないことです。約15年前の1981年、Doll と Peto が、“The Causes of Cancer: Quantitative Estimates of Avoidable Risks of Cancer in the United States”と呼ばれる論文を発表、各々の要因別にリスクの大きさと、許容しうるリスクを推定しました。彼らは、このなかで、がんの予防法を見つけるためには、二つのアプローチがある、即ち、がんの生物学を理解するメカニステイックなものと、がんの主な要因と、そのなかで介入しうるものを見出す「ブラック・ボックス」法とであるといっています。分子生物学の発展が著しい今日でも、この「ブラック・ボックス」法がいまだに唯一の有効な方法であり、人集団を直接観察して得られた疫学データは、がん予防の対策と成果の評価に必須であうることは将来も変わりないものと考えます。なんとか我が国でも、日本人を対象として、日本のデータにもずいたリスク評価ができないものかと深く感じました。

第18回日本がん疫学研究会に参加して

中村好一（自治医科大学公衆衛生学教室）

前号の NEWS CAST は1995年6月2日に開催された第18回日本がん疫学研究会の前に手元に届いていましたが、目を通さずに研究会に参加しました。会の冒頭で重松逸造先生が仰っていたように、会場の広島医師会館は周囲に飲食店などが無いところだそうで、昼食に予約した弁当を持って会場のロビーに行き、深尾彰、渡辺能行両先生の横に座って弁当を食べたのが運のつきで、この原稿をしたためています。帰ってから NEWS CAST を読むと、玉腰暁子先生が、深尾先生に見つかると原稿依頼がある旨きちんと書かれており、改めて情報の活用ということについて、反省させられました（きちんと情報を把握していれば、このような軽率な行動は無かったでしょう）。

さて、本年の日本がん疫学研究会は、主題を「がんのリスク評価」ということで、（財）放射線影響研究所の馬淵清彦疫学部長を会長として開催されました。最近の疫学研究（特に米国の疫学研究）においては「相対危険を計算することが疫学の（究極の）目的である」という風潮の中（私自身も、このような考え方に多少染まっており、反省しています）で、疫学研究から得られた相対危険をどの様に評価し、疫学の本来の目的である疾病予防や健康増進にどの様につなげるか、という risk assessment や risk management を主題に取り上げられた馬淵会長の慧眼に敬服いたしました。

午前中は放射線被曝とリスクの関係が主として原爆被爆者のデータから、また、喫煙とがんのリスクの関係が平山コホートと原爆被爆者のデータから、それぞれ論じられました。モデリングの難しさ、外的妥当性の問題、曝露の評価方法など、今後の検討課題も整理されており、参考になりました。

午後の前半は肝がん、乳がんのリスクに関する発表で、肝がんにおけるＢ型もしくはＣ型肝炎ウイルス感

染、乳がんにおける乳がん遺伝子 BRCA1 の問題と、これらの因子と他の危険因子の交互作用に関しての発表がありました。討論の中で平山雄先生が「結核菌の存在を無視した結核の疫学が考えられないのと同様に、これらの因子を無視した疫学も今後は有り得なくなる可能性がある」（正確な文言はこうではなかったのですが、主旨はこの様に理解しました）と仰ったのが印象的で、ひょっとしたら従来の調査票による曝露情報の収集は時代遅れになってしまうのではないかしら、とも思っています。

最後は「がん予防におけるリスク評価の役割－現状と展望」というパネル・ディスカッションでした。パネリストのお名前をよく見ると、がんの疫学を専門とされているのは大島明先生のみで、行政、社会心理学、マスコミなど様々な視点からのリスクに対する考え方が述べられて、興味深く拝聴させて頂きました。

近年、がん疫学研究会では一般演題を無くして、今回のように比較的多くの時間をかけた発表および討論の形式を採っています。さらに、研究会終了後に成果を刊行する慣習も成立している様に見受けられ、人文社会系の学会の形式になりつつあります。一般演題の公表は他の機会もありますので、この様な形式の学会も今後発展していくことを期待いたします。

最後になりましたが、久道茂代表幹事の「Simple and Scientific」という言葉どおりの素晴らしい会を催して下さった、重松逸造先生、馬淵清彦先生はじめ、(財)放射線影響研究所関係各位に、この場を借りて御礼申し上げます。

量から質へ
－日本のがん疫学研究者の直面する課題－

清水弘之（岐阜大学医学部公衆衛生学教室）

今年の２月、愛知県がんセンター疫学部の田島先生の呼びかけで、中年（30代後半～40代後半）のがん疫学関係者数人が名古屋に集まって、「日本のがん疫学研究の将来を展望する(？)集い」が持たれた。私も参加者の一人であるが、その時に出た話、および私が言った内容を中心に、最近私が思っていることを述べ、日本の若いがん疫学研究者へのメッセージとしたい。

◆

日本のがん疫学研究は、アメリカのそれに比べ残念ながら見劣りがする。その理由を要約すると、アメリカの研究においては、1）暴露の測定、2）影響の評価、3）研究デザインの３点がしっかりしていて、日本の追随を許さないことにある。この３点はすべて、日本のがん疫学研究者の質が低いことによるのか。その傾向なしとは言い難い部分もあるが、主な原因は研究費の不足にある。暴露の測定と影響の評価を確実に行なおうとすれば10の費用がかかるところを、最初からそんな多額は無理だとあきらめて、1～2の予算で研究のデザインを組んでしまう。そして、数年後にやっと得られる結果は当然不完全で、注いだ費用と人的エネルギーが生きてこない。それでも、これまでは目こぼしを受けて、何とかやって来ることができたが、万一、若い研究者がこの程度でよいと思っているのなら、大きなまちがいである。

◆

がん疫学研究の予算が急に増えるとは思えない。わずかな予算を総花式に配分して、不完全で他の分野から信用されない研究結果に甘んじることを避けるためには、研究費の重点配分が必要である。しかし、短期的に見れば、少数の研究者を優遇し、大部分の研究者にはしばらく大きな仕事を待ってもらうことになる。問題は、どの研究（あるいは研究者・研究者群）に重点的な配分を行うか、その決定方法にある。中立の審査委員会による厳正な決定、その他、納得のいく方法を考えなければならない。

◆

重点配分を受けることができなかった研究者は、それこそ知恵を絞りに絞って、費用がかからず、仲間があっと驚くような研究に着手しなければならない。まさしく、研究者としての腕の見せどころである。少額の予算で無理なデザインを組まない方がいい。手持ちの研究費の範囲内で実現可能な、質のよい研究を心がけるべきである。その場合、欧米人が目をつけないところで勝負という言い方をよくするが、私は好まない。日本にしかない材料で研究するのを否定するわけではないが、それでは勝負を回避したきらいがある。野茂の投げているボールは特別性ではない。アメリカの他の投手の使うボールと同じボールを投げてたくさんの三振を奪い、アメリカ人の度肝を抜いている。

◆

最低限の研究費が必要だと述べた。しかし、十分な研究費さえあればまちがいなく研究の質があがるというものではない。当然、研究者自身の実力を向上させなければならない。資質のある者の発見が第一。学問の進歩は才能による。次いで、その若者に来てもらえるような魅力ある世界の創設と維持。順序はこの逆かもしれない。魅力の一つは、研究が楽しそうに見えること。そして、金持ちであること（研究費および研究者の個人的収入）。トレーニングは学問を進歩させるのではなく、作業能率の向上に寄与するのだと、私は思っている。しかし、トレーニングにより、研究者の一般的レベルが上がるなら、その意義は少なくない。先輩－後輩の関係（組織）も重要となる。

◆

日本のがん疫学研究の先駆けとなられた諸先輩は、この国にがんの疫学研究に携わる者のあまりにも少ないことを嘆かれて、ここ数十年、量を増やすことに力を注がれた。斯く言う私も20年前、志のないまま誘われ、増やされるべき量の一人に加わって、馬齢を重ねてしまった。先駆者諸氏が日本がん疫学研究会という組織を作られたのは、トレーニングと仲間作りの両方の目的があってのことかと思う。さらに、組織の存在を示すことによって、少しでも人と金を集めやすくし

ようとされたのかもしれない。その甲斐あって、若い研究者がずいぶん増えた。今や、量より質の時代である。私がこの分野に足を踏み入れた頃と比べ、若手の担う責任の趣が異なってきたと思っている。若い方々の一層の研鑽をお願いしたい。中年は中年の分をわきまえるつもりでいる。

◆

より詳細なメカニズム追究を旗印に、がんの疫学研究も他の基礎科学に歩調を合わせようとしてきた。血清疫学という言葉がはやったのは10年くらい前のことであったか。今では、分子疫学という言葉に取って代られた。新しい技術を利用してメカニズムの解明に挑むのは、病因学として大いに結構と思う。しかし、必然的な因果関係の証明を目指すメカニズム研究は、技術の進歩と共にきりがなく、永遠に続く。見方を変えて、未だ詳細が不明な部分（b1ack box）の中身を不問に付して、かつ、当該の因子に焦点を当てることで他を捨象することにより、人間に起こる事象とその生活行動関連因子の関係を確率的に明らかにしようとするのが疫学ではなかったのか。流行から外れては研究費もとりにくいかもしれないが、ここで私が述べたような疫学研究（研究ではなくて、単なる作業かもしれないが）を地道に続け、病因学の中で他の基礎分野とは違った領域の存在を示し、また堅持してくれる、そんな若手研究者が１人くらいいてもいいではないかと、思っている。

1995年度日本がん疫学研究会 幹事会議事録要旨

日　時：1995年６月１日（木）　17:00～19:00
場　所：放射線影響研究所講堂（広島）
出席者：久道（代表）、馬淵（会長）、富永（前代表）、深尾、柳川、中地、村田、稲葉、渡辺（昌）、山口、山本、徳留、小川、田島（庶務担当）、黒石、大島、花井、吉村、福田、秋葉

１．庶務報告

庶務担当幹事から、1995年6月現在の会員数は271名（幹事数は33名）と報告された。第17回日本がん疫学研究会の記録集は篠原出版から癌の臨床41巻（1995年）：4月号の特集「がんの高危険群の臨床疫学的特徴」（¥1,900）として発刊されたので会員諸氏に購読を期待したい旨、報告があった。（過去の記録集発刊状況参照）

２．ニュースレターの発刊

深尾幹事から以下のような報告があった。昨年度から日山幹事と編集委員を引継ぎNO.40を発刊したが、本年1月17日に阪神大震災で日山幹事が逝去され、その追悼記念集としてNo.41を発刊した。また、新しい編集委員として京都府立医大の渡辺能行先生にお願いし、さっそく5月にはNO.42を発刊した。今年は４号発刊する予定で進めているので、原稿の投稿など会員や幹事の方々のご協力をお願いしたい。

３．会計報告

庶務担当幹事から平成６年度の会計収支報告され、花井監事から監査報告があり承認された。平成６年度は会費納入が予定より少なかったため結果的に収入減となったが、その点については平成７年度に積極的に会費を集めるべく善処することになった。平成７年度の予算案については、収入見込みが控えめに見積もられているが、特別行事の企画のために予備費20万円を計上することになり、承認された。

４．役員等の一部改選

代表幹事から、今年度で任期切れ予定の幹事17名の再選は幹事による選挙で決めることにし、ついでに幹事会の活性化を図るため若手の幹事候補を数人挙げて、合わせ選挙して定員内で決めるのが妥当ではないか、との提案があり承認された。また、それに関連して産業医大の大久保幹事からは「活動的な若手幹事に席を譲って自分は幹事を辞退したい」旨、前もって届出があった。

さっそく、大久保幹事、故日山幹事を除く16名の現幹事と８名の候補者で選挙が行われ、現幹事から13名、新幹事として５名、合計18名が選出された。新幹事には、岸玲子（札幌医大）、津金昌一郎（国立がんセンター）、渡辺能行（京都府立医大）、津熊秀明（大阪成人病センター）、大瀧慈（広島大学）の各氏らが選出された（資料１参照）。

さらに、昨年度の幹事会で代表幹事の任期を２年と定めることになったので、次期代表幹事も選挙で決めておくべきである、との意見がまとまり、大島幹事（大阪成人病センター）が選出された。

５．会則の一部変更

幹事の選出に際して現会則が実体にそぐわないことが判明したので、以下のように一部変更する案が出され、この点については総会で承認を受ける旨、承認された。なお、第11条の代表幹事選出、第12条の幹事選出の項は、第13条の監事選出の項の前に列記することになった。

変更部分（下線）は第12条の幹事の選出は一般会員の互選によるで幹事の選出は一般会員の推薦により、幹事会で選考し、総会の承認を経て決めると改め、第１３条の３項とする（資料２参照）。

６．次年度および次々年度の研究会開催

次年度（平成８年度）の第19回日本がん疫学研究会の会長、徳留信寛幹事（名古屋市立大学公衆衛生学）から、次期研究会についての意向が述べられた。（案内参照）

次々年度（平成９年度）の会長候補について代表幹事から福田幹事（久留大学医学部公衆衛生学）が推薦され、同氏も受諾し承認された。

7．その他

富永前代表幹事から、本年８月３、４日に「がん予防研究会」が、国立がんセンター、国立札幌病院、愛知県がんセンター、国立病院四国がんセンター、などを結ぶ初めての試みである多地点テレビ会議として開催されることになっているので、近くの会場で是非参加して頂きたい、旨報告があった。(NEWS CAST 本号６ページを参照のこと)

渡辺(昌)幹事から、International Conference on Food Factors: Chemistry and Cancer Prevention が本年12月10～15日に浜松市で開催されるので参加して頂きたい、旨報告があった。(NEWS CAST No.42を参照のこと)

―資料１― 日本がん疫学研究会

幹事・監事・特別会員・顧問会員

1) 幹　事

岸　玲子**　札幌医大公衆衛生学講座
久道　茂*　東北大医学部公衆衛生学教室
深尾　彰*　東北大医学部公衆衛生学教室
柳川　洋*　自治医科大公衆衛生学教室
古野純典*　防衛医科大公衆衛生学教室
笹波隆文*　埼玉県がんｾﾝﾀｰ研究所疫学部
中地　敬*　埼玉県がんｾﾝﾀｰ研究所疫学部
村田　紀*　千葉県がんｾﾝﾀｰ研究局疫学研究部
稲葉　裕**　順天堂大医学部衛生学教室
津金昌一郎**　国立がんｾﾝﾀｰ研究所支所 臨床疫学研究部
渡辺　昌**　国立がんｾﾝﾀｰ研究所がん情報研究部
山口直人**　国立がんｾﾝﾀｰ研究所がん情報研究部
簑輪眞澄*　国立公衆衛生院疫学部
恒松由記子**　国立小児病院血液腫瘍科
山本正治**　新潟大医学部衛生学講座
清水弘之*　岐阜大医学部公衆衛生学教室
大野良之*　名古屋大医学部予防医学教室
徳留信寛**　名古屋市大医学部公衆衛生学教室
佐々木隆一郎*　愛知医大公衆衛生学教室
小川　浩**　愛知みずほ大人間科学部健康科学
富永祐民**　愛知県がんセンター研究所
田島和雄*　愛知県がんセンター研究所疫学部
黒石哲生**　愛知県がんセンター研究所疫学部
渡辺　決*　京都府立医大泌尿器科学教室
渡辺能行**　京都府立医大公衆衛生学教室
大島　明*　(財)大阪がん予防検診ｾﾝﾀｰ調査部
花井　彩**　大阪府成人病センター調査部
津熊秀明**　大阪府成人病センター調査部疫学課
森本兼曩*　大阪大学医学部環境医学教室
大瀧　慈**　広島大学原医研環境情報計量生物学
馬淵清彦*　(財)放射線影響研究所疫学部
吉村健清**　産業医大産業生態科学研究所 臨床疫学
福田勝洋**　久留米大学医学部公衆衛生学教室
秋葉澄伯**　鹿児島大学医学部公衆衛生学講座

2) 監　事

花井　彩**　大阪府成人病センター調査部
清水弘之*　岐阜大学医学部公衆衛生学教室

3) 特別会員

平山　雄　予防がん学・予防老化学研究所
栗原　登　宮城県対がん協会
藤本伊三郎　地域がん登録全国協議会
加美山茂利　仙台予防医学研究所
加藤寛夫　国立水俣病研究センター
重松峻夫　福岡大学医学部公衆衛生学教室
青木國雄　(財)愛知県健康づくり振興事業団
井上怜子　(財)神奈川県予防医学協会
川井啓市　京都府立医科大学公衆衛生学教室
廣畑富雄　九州大学医学部公衆衛生学講座
三宅浩次　札幌医科大学公衆衛生学講座
中村健一　昭和大学医学部衛生学教室

4) 顧問会員

倉恒匡徳　九州大学名誉教授
重松逸造　放射線影響研究所理事長
菅野晴夫　(財)癌研究会癌研究所名誉所長
山本俊一　聖路加看護大学副学長
杉村　隆　国立がんセンター名誉総長
小林　博　(財)札幌がんセンター理事
Brian E. Henderson　南カリフォルニア大学教授
Robert W. Miller　NCI臨床疫学部長
Hiroshi Nakajima　WHO事務総長

*　幹事・監事の任期：1994年7月1日～1996年6月30日
**　幹事・監事の任期：1995年7月1日～1997年6月30日

―資料２― 日本がん疫学研究会会則（抜粋）

第５章　役　員

第10条　本会に次の役員を置く。
　代表幹事　１名
　幹　事　若干名
　監　事　２名

第11条　代表幹事は本会を代表し、幹事会の開催ほか会務を主宰する。

第12条　幹事は代表幹事を補佐し、本会の運営を行う

第13条　1. 代表幹事の選出は幹事の互選による。
　2. 幹事の選出は一般会員の推薦により幹事会で選考し、総会で承認を経て決める。
　3. 監事は代表幹事が委嘱し、会計を監査する。

第14条　1. 役員の任期は２年とし、再任することができる。
　2. 役員は任期が満了しても、後任者の選出を行うまではその職務を続行しなければならない。

ー著書紹介ー

先日開催されました第18回日本がん疫学研究会のパネル・ディスカッションのパネリストの著書を2・3紹介致します。

岡本浩一　東洋英和女学院大学人文科学人間科学科
助教授
連絡先：〒226　横浜市緑区三保町32-1
TEL ： 045-922-5511（代）
TEL ： 045-922-7265（研究室）
著　書：リスク心理学入門ーヒューマン・エラーとリスク・イメージー，サイエンス社，1,854円

松原純子　横浜市立大学看護短期大学部長
連絡先：〒236　横浜市金沢区福浦3-9
TEL ： 045-787-2521（部長室）
TEL ： 045-787-2799（個人研究室）
FAX ： 045-785-7815
著　書：　リスク科学入門ー環境から人間への危険の数量的評価ー，東京図書，6,180円
いのちのネットワークー環境と健康のリスク科学ー，丸善ライブラリー，640円

日本がん疫学研究会開催状況および記録集発刊状況

第1回　1977年12月17日（世話人：富永祐民他），名古屋，がんの計量疫学，篠原出版：癌の臨床別集「がんの計量疫学」平山雄編，1980年7月25日刊（¥3,600）

第2回　1979年5月27日（世話人：富永祐民他），名古屋，日本人に多いがん、少ないがんーその疫学と病態生理ー，篠原出版：癌の臨床別集「がん・日本と世界ーその動向と病因論」長与健夫、富永祐民編、1980年10月20日刊（¥6,000）

第3回　1980年6月28日（世話人：藤本伊三郎他），大阪，がん登録の疫学的意義とその応用，篠原出版：癌の臨床別集「がん登録と臨床疫学」藤本伊三郎，大島明編，1981年4月13日刊（¥3,500）

第4回　1981年6月27日（世話人：久保利夫他），埼玉，がん研究ー疫学と病理学の接近ー，篠原出版：癌の臨床　Vol.28，No.8，1982，特集「がん研究、疫学と病理学の接近」

第5回　1982年6月11日（世話人：栗原登他），広島，がん研究における生物学と統計学の接近，抄録集のみ

第6回　1983年6月2日（会長：倉恒匡徳），福岡，職業がん，篠原出版：癌の臨床別集「職業がんー疫学的アプローチー」倉恒匡徳編，1984年12月1日刊（¥3,900）

第7回　1984年6月22日（会長：久道　茂），仙台，がんの一次予防と二次予防，篠原出版：癌の臨床別集「がんの一次予防と二次予防」市川平三郎，久道茂編。1987年3月30日刊（¥5,500）

第8回　1985年6月28日（会長：加美山茂利），秋田，がんと食事・栄養ー疫学的ならびに実験的アプローチ篠原出版：癌の臨床　Vol.32，No.6，1986，特集「がんと栄養・食事ー疫学的ならびに実験的アプローチ」（¥4,000）

第9回　1986年6月26日（会長：村田　紀），千葉，がん病因における宿主要因と環境要因，篠原出版：癌の臨床　Vol.33，No.5，1987，特集「がん病因における宿主要因と環境要因」（¥4,300）

第10回　1987年6月12日（会長：大野良之），名古屋，がんの分析疫学研究ー方法と解析ー，篠原出版：癌の臨床別集「臨床家のためのがんのｹｰｽｺﾝﾄﾛｰﾙ研究ー理論と実際ー」大野良之編。1988年6月1日刊（¥5,500）

第11回　1988年6月3日（会長：渡辺　昌），東京，がん対策において疫学は何ができるか？　篠原出版：癌の臨床　Vol.35，No.2，1989，特集「がん対策において疫学は何ができるか」（¥4,500）

第12回　1989年6月17日（会長：廣畑富雄），福岡，がんとライフスタイルーがん予防への道ー，篠原出版：癌の臨床 Vol.36，No.3，1990，2月臨時増刊号，特集「がんとライフスタイルーがん予防への道」（¥5,150）

第13回　1990年7月6日（会長：三宅浩次），札幌，がんとライフスタイル，篠原出版：癌の臨床 Vol.37，No.3，1991，2月臨時増刊号，特集「日常生活とがん予防」（¥4,326）

第14回　1991年6月13日（会長：稲葉　裕），東京，がんと先行病変，篠原出版：癌の臨床 Vol.38，No.3，1992，特集「癌と先行疾患」（¥4,850）

第15回　1992年6月12日（会長：大島　明），大阪，がん予防の実践とその評価，篠原出版：癌の臨床 Vol.39，No.4，1993，3月臨時増刊号，特集「がん予防の実践とその評価」（¥4,700）

第16回　1993年6月26日（会長：中村健一），東京，がん疫学研究の原点と展開，篠原出版：癌の臨床 Vol.40，No.2，No.4，1994，特集「がん疫学研究の原点と展開 1，2」（各¥1,900）

第17回　1994年6月3日（会長：渡辺　決），京都，がん疫学研究と臨床医学の接点，篠原出版：癌の臨床 Vol.41，No.4，1995，特集「がんの高危険群の臨床疫学的特徴」（¥1,900）

第19回日本がん疫学研究会(ご案内第一報)

会　長：徳留信寛（名古屋市立大学公衆衛生学教授）
主　題：食生活関連がんの予防
日　時：平成８年８月26日（月）９：00～17：00
会　場：名古屋市立大学病院大ホール
連　絡：〒467　名古屋市瑞穂区瑞穂町川澄１
TEL：052-853-8174，FAX：052-842-3830

第2回がん予防研究会

代表世話人：阿部　薫（国立がんセンター）
主　題：○肝がん
○化学予防
○内視鏡下にみられる消化管がんの予防の面からみたバイオマーカー
日　時：平成７年８月３日（木），４日（金）
会　場：国立がんセンターをメイン会場として国立札幌病院、愛知県がんセンター、国立病院四国がんセンターを結ぶテレビ会議
連　絡：〒104　東京都中央区築地5-1-1
TEL：03-3542-2511（内線2212）
FAX：03-3542-8702（総長室）

第2回英国疫学・公衆衛生コースご案内

［開催要旨］

第１回英国疫学・公衆衛生コースは、1994年１月に自治医科大学で開催されました。英国からは Walter W. Holland 教授他２人が、日本からは柳川　洋教授他10人が講師を務めました。コース内容は大変好評で、ぜひこのようなコースをもっと広めるべきとの要請がありました。

そこで第14回国際疫学会学術集会が1996年８月に名古屋で開催されるのを機に、今回は海外からも受講生を募り、第２回コースを企画しました。

大学などの研究者、保健所医師、産業医、生命保険に携わる医師など、疫学の実践者の参加をお待ちしています。ふるってご応募ください。

［コースの概要］

1．日　時：1996年(平成８年)８月19日(月)～25日(日)(７日間)
2．場　所：関西システムラボラトリ
(英名：Kansai Systems Laboratory)
〒540　大阪市中央区城見２丁目2-6
電話：06-949-3211
3．募集人員：日本人20人とアジア太平洋地域から10人(公衆衛生・疫学の研究者と第一線の公衆衛生活動従事者)期間中、上記場所で合宿可能な者
4．コース内容：講義(午前中)と各自の演題発表と討論(午後)
1) Planning and organisation of health services in relation to need
2) Evaluation of health services and procedures
3) Measurement of levels of health
4) Intervention, control and surveillance of outbreaks of disease and environmental hazards
5．参加費用：５万円（予定）
6．主催：英国疫学・公衆衛生コース運営委員会
1) 運営委員長
(英国)：Walter W. Holland 教授
(日本)：橋本　勉(和歌山医大公衆衛生・教授)
2) 顧　問：重松逸造(放射線影響研究所・理事長)
青木國雄(国際疫学会・会長)

参加ご希望の方は、今年の８月末までに事務局まで申し込み用紙を請求してください。

事務局：〒640　和歌山市九番丁２７
和歌山県立医科大学公衆衛生学教室内
英国疫学・公衆衛生コース事務局
森岡　聖次
電話：0734-26-8325（直通）
FAX　：0734-31-0654

東西

東西編集後記

先の第18回日本がん疫学研究会総会で、思いもかけず幹事の大役を仰せつかり恐縮致しております。そういえば、小生も数年前に40歳の大台にのり（一の位での四捨五入ではまだ40歳ですが）、今や立派（？）な中年の域に達しており、日本がん疫学研究会のためにもっと働くようにとの先輩諸先生方の思し召しと理解し、微力を尽くしたいと考えております。そこで、一言。「NEWS CAST への原稿を宜しくお願い致します。」
（京都府立医科大学公衆衛生学教室　渡辺能行）

発行
日本がん疫学研究会
事務局　〒464　名古屋市千種区鹿子殿１－１
愛知県がんセンター研究所疫学部　気付
TEL: 052-762-6111　FAX: 052-763-5233
振込口座　名古屋1-37001
編集責任者
深尾　彰
渡辺能行